

【晋紀十四】 起玄默敦牂，盡昭陽協洽，凡二年。

■東晋、▲慕容氏、続国訳漢文大成. 経子史部 第 6 卷 13p

中宗元皇帝下永昌元年（壬午，322年）

【王敦の反乱】

■春，正月，郭璞は復た上疏し，皇孫の生まれるに因りて，赦令を下すを請い，帝は之に従う。乙卯（1日），大赦し，改元す。

■「郭璞は王敦の叛意を見抜く」王敦は璞を以て記室參軍と為す。璞は善く卜筮し，敦は必ず亂を為し，己は其の禍に預ると知り，甚だ之を憂う。大將軍の掾の潁川の陳述は卒し，璞は之を哭きて極めて哀れみ，曰く、

「嗣祖（陳述の字、王敦の府僚）は，焉んぞ福に非ざるを知らん也！」

■「王敦は才能を幕府に集める」敦は既に朝廷と乖離し，乃ち朝士の時望有る者を（6-013p）羈録（^{きろく}繋ぎ録す）し，己の幕府に置き，羊曼及び陳國の謝鯤を以て長史と為す。曼は，祐之兄の孫也。曼、鯤は終日酣醉（十分に酒を飲み酔う）し，故に敦は事を以て委ねず。敦は將に亂を作さんとし，鯤に謂って曰く、

「劉隗は奸邪にして，將に社稷を危うくせんとす，吾は君側之惡を除かんと欲するが，何如や？」鯤は曰く、

「隗は誠に禍を始めるとも，然れども城狐社鼠（^そ城に住む狐、社に住む鼠で燠蒸するときは城社を焼く、君側の患の譬え）なり」

敦は怒りて曰く、

「君は才を庸し，豈に大體に達するや！

出でて豫章太守と為し，又た留めて遣らず。

■「王敦は武昌に挙兵、帝は討伐令を発す」戊辰（14日），敦は武昌に兵を挙げ，上疏して劉隗の罪狀をあげ，稱す、

「隗は佞邪讒賊にして，威福は自ら由り，妄りに事役を興し，士民を勞擾し，賦役は煩重にして，怨聲は路に盈れる。臣は位に宰輔に備わり，坐して成敗を視る可からず，輒ち進軍して討を致さん。隗の首を朝に懸ければ，諸軍は夕には退かん。昔太甲（殷の湯王崩じて湯王の典刑を転覆す）は厥の度を顛覆し，幸いにも伊尹之忠を納れ，殷の道は復た昌にす。願はくは陛下は深く三思を垂れよ。則ち四海は乂安（^が世の中がよく治まって穏やか）に，社稷は永く固まらん矣。」

沈充も亦た兵を呉興に起こし以て敦に應じ，敦は充を以て大都督と為し，東吳の諸軍事を督護せしむ。敦は蕪湖（安徽省蕪湖道蕪湖県、現・蕪湖市湾沚区）に至り，又た上表して刁協の罪狀をあげる。帝は大いに怒り，乙亥（21日），詔して曰く、

「王敦は寵靈を憑恃（^{ひょうじ}頼みに）し，敢えて狂逆を肆（^{ほし}いまま）にし，朕を太甲と方べ，幽囚せ見れんと欲す。是れ忍ぶ可き也，孰れか忍ぶ可からずや！今親ら六軍を帥いて以て大逆を誅さんとしす，敦を殺す者有れば，五千戸侯に封じん。」

敦の兄の光録助の含は輕舟に乗りて逃げて敦に歸す。

■太子の中庶子の溫嶠は僕射の周顗に謂って曰く、

「大將軍の此の舉は在る所有るに似たり、當に濫する無かるべき邪？」

顗は曰く、

「然らず。人主は堯、舜に非ざるよりは、何ぞ能く失う無からん、人臣は安んぞ兵を擧げて以て之を脅かす可けんや！舉動は此くの如きは、豈に亂に非らず雲うを得る乎！處仲（王敦の字）は狼抗（狼の如く貪り敢えて人に抵抗）して上を無くす、其の意は寧んぞ限り有らん邪！」

■ 〔甘卓は王敦に同行を躊躇〕 敦は初めて兵を起こすや、遣使して梁州刺史の甘卓（襄陽に鎮す）に告げ、之と俱に下らんと約し、卓は之を許す。敦が舟に升るに及び、而して卓は赴かず、參軍の孫雙をして武昌に詣りて敦を諫止せ使む。敦は驚いて曰く、

「甘侯は前に吾と語りて、雲何^{いかに}而して更に昇^こ（異）なる有るや？正に當に吾が朝廷を危うくせんを慮る耳！吾は今但だ奸凶を除き、若し事濟れば、當に甘侯を以て公と作さん（公と為す論功で釣る）。」

雙は還りて報じ、卓は意は狐り疑す。或ははひと卓を説くに、

「且^{しば}く僞りて敦を許し、敦の都に至るを待ち而して之を討つべし。」

卓は曰く、

「昔陳敏之亂（86 卷惠帝永興二年、懷帝永嘉元年）には、吾は先ず従い而して後に之を圖る、論者は吾が逼られるを懼れ而して變を思うと謂い、心は常に之を愧じる。今若し復た爾れば、何を以て自ら明かにせん！」

卓は人をして敦の旨を以て順陽太守の魏該に告げ使め、該は曰く、

「我が兵を起こして胡賊を拒む所以の者は（6-015p）正に王室に忠ならんと欲する耳。今王公は兵を擧げて天子に向かい、吾の宜しく與にする所に非ざる也。」

遂に之を絶つ。

■ 〔譙王承らは王敦に付かず、討伐軍を挙げる〕 敦は參軍の桓胤^{かんひ}を遣わして譙王の承を説かしめ、承に軍司と為るを請う。承は嘆じて曰く、

「吾は其れ死せん矣！地は荒れ民は寡く、勢いは孤にして援は絶える、將に何を以て濟さん！然れども忠義に死するを得、夫れ復た何をか求めん！」

承は長沙の虞悝を檄して長史と為し、會々悝は母の喪に遭い、承は往きて之を吊（弔）い、曰く、

「吾は王敦を討たんと欲す、而れども兵は少なく糧乏しく、且つ新たに到りて、恩信は未だ洽^{あまね}かならず。卿の兄弟は、湘中之豪俊なり、王室は方に危うく、金革之事（禮記に、三年の喪は卒哭すれば金革の事は避ける無し。春秋公羊傳に、古に臣に大喪有れば則ち君は三年其の門に呼ばず。已に練ずれば弁冕を以て金革の事に服す可し。君これを使うは非なり。臣これを行うは禮なりと）は、古人の辭せざる所、將に何を以て之に教えんとするや？」

悝は曰く、

「大王は悝の兄弟の猥劣なるを以てせず、親ら屈して之に臨み、敢えて死を致さず！然るに鄙州は荒弊し、以て進みて討ち難し。宜しく且^{しば}く衆を収めて固く守り、檄を四方に傳えれば、敦の勢いは必らず分けん、分れて而して之を圖れば、庶幾^{こいねが}わくは捷つ可し也。」

承は乃ち桓胤を囚え、悝を以て長史と為し、其の弟の望を以て司馬と為し、諸軍を督護せしめ、零陵太守の尹奉、建昌（晉の惠帝の元康九年に長沙の東北下雋諸県を分けて建昌郡を置く）太守の長沙王の循、衡陽（吳の孫亮太平二年に長沙西部都尉を分けて衡陽郡を立てる。淮陵県は臨淮郡に属す）太守の淮陵の劉翼、舂陵令の長沙の易雄と、同じく兵を擧げて敦を討つ。雄は檄を遠近に移し、敦の罪惡を列べ、是に於いて一州之内は皆な承に應ず。惟だ湘東（吳の孫亮太平二年に長沙東部都尉を分けて湘東郡を置く）太守の鄭淡は従わず、承は虞望をして討ちて之を斬ら

しめ、以て四境を徇^と（広く告げ回る）える。淡は、敦の姉の夫也。

■ 「鄧騫・李梁は甘卓を説く」 承は主簿の鄧騫を遣わして襄陽（晉の梁州刺史が襄陽に鎮するは周訪より始まる）に至り、甘卓を説かしめて曰く、

「劉大連（劉隗の字）は驕蹇（驕り高ぶる）にして衆心を失うと雖も、天下に害有るに非ず。大將軍は其の私憾を以て、兵を稱して闕に向う。此れ忠臣義士は節を竭くす之時也。公は任を方伯に受け、辭を奉じて罪を伐てば、乃ち桓、文之功也。」

卓は曰く、

「桓、文は則ち吾の能くする所に非ず、然れども志は國に徇うに在り、當に共に詳らかに之を思わん。」參軍の李梁は卓を説いて曰く、

「昔隗囂^{かいこう}は跋扈し（41 卷漢の光武帝建武五年より 43 卷十二年）、竇融^{とうゆう}は河西を保ちて以て光武に奉じ、卒に其の福を受ける。今將軍は天下に重望有り、但だ當に兵を按じて坐して以て之を待つべし。大將軍をして（続は事を追加）捷た使めれば、當に將軍に委ねるに方面を以てすべし、捷たざれば、朝廷は必ず將軍を以て之に代えん。何ぞ富貴ならざるを憂え、而して此の廟勝（廟算勝つ）^すを釋て、存亡を一戦に決せん邪？」

騫は梁に謂って曰く、

「光武は創業之初めに當たる、故に隗、竇は文服（心服せず、ただ文を以て服従する）を以て從容として顧望（形勢觀望）す可し。今將軍之本朝に於けるは、竇融之比に非らざる也。襄陽之太府（襄陽は王敦の府）に於けるは、河西之固きに非らざる也。大將軍をして劉隗に克（続、活×）ち、武昌に還り（6-016p）、石城之戍を増し、荆、湘之粟を絶た使めば、將軍は安くに歸らんと欲する乎！勢いは人の手に在り、而して我は廟勝する處と曰うは、未だ之を聞かざる也。且つ人臣と爲り、國家に難有れば、坐して視て救わざれば、義は安からん乎！」

卓は尚ほ之を疑う。騫は曰く、

「今既に義舉を為さず、又大將軍の檄を承けざれば、此れ必ず至る之禍いは、愚智の見る所也。且つ議者之難しとする所は、彼は強く而して我は弱きを以てす也。今大將軍の兵は萬餘に過ぎず、其の留まる者は五千に能わず。而らば將軍の見衆（現状の実数）は既に之に倍す矣。將軍之威名を以て、此の府之精銳を帥い、節に杖り鼓を鳴らし、順を以て逆を討てば、豈に王含の能く禦ぐ所なるを哉！流れを溯る之衆（王敦の兵は下流にあり、武昌から襄陽は溯る事になる）は、勢いは自ら救わず、將軍之武昌を擧げるは、枯れたるを摧き朽ちたるを拉す若し、尚ほ何を顧慮する邪！武昌は既に定まり、其の軍實に據り、二州（荊州江州）を鎮撫し、恩意を以て士卒を招懷すれば、還る者をして歸るが如くせ使めん、此れ呂蒙の關羽に克つ（68 卷漢の獻帝建安 24 年の三国志時代）所以也。今必勝之策を釋て、安坐して以て危亡を待つは、以て智と言う可からず矣。」

■ 「樂道融は逆に甘卓を説く、陶侃は武昌を攻める」 敦は卓が後に於いて變を為すを恐れ、又大參軍の丹楊の樂道融を遣わして往きて之を邀えしめ、必ず之と俱に東せんと欲す。道融は敦に事えると雖も、而して其の悖逆に忿り、乃ち卓を説いて曰く、

「主上は親ら萬機に臨み、自ら譙王を用いて湘州と為し、専ら劉隗に任ずるに非ざる也。而して王氏は權を擅にして日久しく、卒に政を分か見れ（譙王承等に分け任じて王敦に専ら歸さず）、便ち職を失うを謂い、恩に背きて逆を肆にし、兵を擧げて闕に向う。國家は君を遇するに至って厚く、今之と同じくすれば、豈に大義に負違せざるや！生きては逆臣と為り、死しては愚鬼と為り、永く宗黨之耻と為らん、亦た惜しからず

乎！君之計を為すに、僞りて命に應じるを許し、而して馳せて武昌を襲うに若くは莫し、大將軍の士衆は之を聞けば、必ず戦わずして自ら潰えん、大勲（勲）に就く可し矣。」

卓は雅（平素）より敦に従うを欲せず、道融之言を聞き、遂に決して、曰く、
「吾が本意也。」

乃ち巴東の監軍の柳純、南平太守の夏侯承、宜都太守の譚該等と檄を露わして敦の逆状を数え、統べる所を帥いて討を致す。參軍司馬の贊、孫雙を遣わして表を奉りて台に詣らしめ、羅英をして廣州に至りて陶侃に同じく進むを約せしむ。戴淵（出て合肥に鎮す）は江西に在り、先ず卓の書を得、表して之を上り、台内は皆な萬歳を稱す。陶侃は卓の信を得て、即ち參軍の高寶を遣わして兵を帥いて北に下らしむ。武昌の城中は卓の軍の至るを伝え、人は皆な奔散す。

■【王敦は長沙を攻め、譙王承は危機】敦は従母弟の南蠻校尉の魏乂、將軍の李恒を遣わして甲卒二萬を帥いて長沙を攻めしむ。長沙の城池は完からず、資儲は又た闕き、人情は震い恐れる。或は譙王の承を説き、

「南に陶侃に投じるべし」

とし、或は、

「退きて零、桂に據るべし」

とす。承は曰く、

「吾之兵を起こすは、志は忠義に死せんと欲す、(6-017p) 豈に生を貪りて苟しくも免かれ、奔敗之將と為る可けん乎！事之濟らざれば、百姓をして吾が心を知ら令める耳。」

乃ち城を嬰して固く守る。未だ幾くもなくして、虞望は戦死し、甘卓は鄧騫を留めて參軍と為さんと欲し、騫は可かず。卓（続は無し）は乃ち參軍の虞冲を遣わしてと騫と偕に長沙に至らしめ、譙王の承の書を遣り、之に固く守るを勧め、

「當に兵を以て沔口に出で、敦の歸路を斷てば、則ち湘の圍みは自ら解かん。」

承は複書して稱す、

「江左は中興し、草創始めて爾り、豈に圖らんや、惡逆は寵臣より萌えるとは！吾は宗室を以て任を受け、志は命は隕とすに在り。而して至止は尚ほ淺く、凡そ百茫然たり。足下は能く甲を卷きて電（電光石火）に赴けば、猶ほ及ぶ所有り。若し其れ狐疑せば、則ち我を枯魚之肆（乾物屋の店。莊子は車轍に鮒を見る。鮒は斗升の水を以て己を救わんと求む。莊子曰く、我が西江の水を決して汝を迎えるを待てと。鮒曰く、君の言の如くんば、早く我を枯魚之肆に索めるに如かずと。つまり間に合わない）に求めん矣。」

卓は従う能わず。

■二月，甲午（10日），皇子の昱を封じて琅邪王と為す。

後趙後趙王の勒は子の弘を立てて世子と為す。中山公の虎を遣わして精卒四萬を將いて徐龕を撃たしむ。龕は堅く守りて戦わず、虎は長圍を築いて之を守る。

【陳安の自立の動き鮮明】

前趙【劉曜は楊難敵を攻めるも病、諭して称藩させる】趙主の曜は自ら將いて楊難敵を撃ち、難敵は逆え戦い、勝たず、退きて仇池を保つ。仇池の諸氏、羌及び故の晋王の保（西晋の南陽王司馬模・司馬保父子）の將の楊韜、隴西太守の梁勛は皆な曜に降る。曜は隴西の萬餘戸を長安に遷し、進みて仇池を攻める。會々軍

中は大に疫し、曜も亦た疾を得、將に兵を引いて還らんとす。難敵の其の後を躡むを恐れ、乃ち光國中郎將（趙の置く官職）の王獫狁を遣わして難敵を説かしめ、諭すに禍福を以てし、難敵は遣使して稱藩す。曜は難敵を以て假黃鉞、都督益、寧、南秦、涼、梁、巴六州、隴上、西域諸軍事、上大將軍、益、寧、南秦三州（南秦州及び巴州は劉曜が始める。南秦州は隆平・武都二郡）牧、武都王と為す。

前趙 **〔陳安は劉曜死すとして涼王自立、賢者を斬る〕** 秦州刺史の陳安（？ - 323年、天水郡成紀県出身、西晋の南陽王司馬模・司馬保父子に仕える）は朝するを曜に求め、曜は辭するに疾を以てす。安は怒り、曜は已に卒すると以爲い、大いに掠し而して歸る。曜の疾は甚しく、馬輿に乗り而して還る。其の將の呼延寔（呼延實は誤り）をして輜重を後に監ぜしめ、安は邀え撃ち、之を獲り、寔に謂って曰く、

「劉曜は已に死し、子は尚ほ誰をか佐けるや！吾は當に子と共に大業を定めん。」
寔は之を叱して曰く、

「汝は人の寵祿を受け而も之に叛す、自ら智能を視るに主上に何如？吾は汝は日あらずして首を上邽の市に梟せられるを見んとす、何を大業と謂うや！宜しく速かに我を殺せ」

安は怒り、之を殺し、寔の長史の魯憑を以て參軍と為す。安は其の弟の集を遣わして騎三萬を帥いて曜を追わしめ、衛將軍の呼延瑜は逆え撃ちて、之を斬る。安は乃ち上邽に還り、將を遣わして汧城（扶風郡に属す県、陝西省關中道隴山の南、現・宝鸡市隴山）を襲わしめ、之を抜く。隴上の氏、羌は皆な安に付き、衆は十餘萬有り、自ら大都督、假黃鉞、大將軍、雍、涼、秦、梁四州牧、涼王を稱し、趙募を以て相國と為す。魯憑は安に對して大いに哭して曰く、

「吾は陳安之死を見るに忍びざる也！」

安は怒り、命じて之を斬らしむ。憑は曰く、

「死は自ら吾が分なり、吾が頭を上邽の市に懸けよ、（6-018p）趙之陳安を斬るを觀ん也！」

遂に之を殺す。曜は之を聞き、慟哭して曰く、

「賢人は、民之望也。陳安は賢を求める之秋に於いて而して多く賢者を殺す、吾は其の為す所無きを知る也！」

前趙 休屠王の石武（匈奴）は桑城を以て趙に降り、趙は武を以て秦州刺史と為し、酒泉王に封じる。

【王導は朝廷に忠なるも、朝廷軍敗北】

■ **〔劉隗は建康に入城、王氏の蕩尽を求めるも聞かず〕** 帝は戴淵、劉隗を征（統は徴）して入りて建康を衛らしむ。隗は至り、百官は道に迎え、隗は岸幘（巾で髪を覆うのみで額を露わす）して大言し、意氣は自若たり。入りて見ゆるに及び、刁協と帝に盡く王氏を誅するを勧める。帝は許さず、隗は始めて懼れる色有り。

■ **〔王導は罪を待ち、周顗は密かに救命す〕** 司空の導は其の從弟の中領軍の遂、左衛將軍の虞、侍中の侃、彬及び諸宗族二十餘人を帥いて、毎旦に台に詣りて罪を待つ。周顗は將に入らんとし、導は之を呼びて曰く、

「伯仁（周顗の字）、百口を以て卿を累わさん！」（周顗に王導一族百人を全くするを欲す）

顗は直ちに入りて顧みず。既に帝に見え、導の忠誠を言い、救うを申して甚だ至る。帝は其の言を納れる。

顗は喜びて飲酒し、酔いに至り而して出で、導は猶ほ門に在り、又た之を呼ぶ。顗は言を與えず、左右を顧みて曰く、

「今年は諸々の賊奴を殺し、金印の鬥大の如きを取り、肘後に系けん。」

既に出で、又た上表して導の無罪を明らかにし、言は甚だ切に至る。導は之を知らず、甚だ之を恨む。

■ 【帝は王導を朝服させて許す】 帝は命じて導を還して朝服せしめ、召して之を見る。導は稽首して曰く、

「逆臣の賊子、何の代にか之れ無し、意わず今者近く臣の族に出るとは！」

帝は跣し而して其の手を執りて曰く、

「茂弘（王導の字）、方に卿に寄すに百里之命（君の政令を攝す）を以てす、是れ何の言を邪！」

■ 【帝自ら出陣、王導も扇動】 三月、導を以て前鋒大都督と為し、戴淵に驃騎將軍を加える。詔して曰く、

「導は大義を以て親を滅ぼす、吾が安東（將軍、帝は揚州に鎮して称する）為る時の節を以て之に假す可し。」

周顗を以て尚書左僕射と為し、王邃を右僕射と為す。帝は王虞おういを遣わして往きて諭して敦とどを止めしむ。敦は従わず而して之を留め、虞は更に敦の用を為す。征虜將軍の周札は、素より矜險にして利を好み、帝は以て右將軍、都督石頭諸軍事と為す。敦は將に至らんとし、帝は劉隗をして金城（江蘇省金陵道句容県、現・鎮江市句容市）に軍し、札をして石頭を守らしめ、帝は親ら甲を被りて師を郊外とたに徇える。甘卓を以て鎮南大將軍、侍中、都督荆、梁二州諸軍事と為し、陶侃に江州刺史を領せしむ。各々統べる所を帥いて以て敦の後を躡ましむ。

■ 【王敦は石頭に攻め入る】 敦は石頭に至り、劉隗を攻めんと欲す。杜弘は敦に言つて曰く、

「劉隗に死士は衆多く、未だ易く克つ可からず、石頭を攻めるに如かず。周札は恩少なく、兵は用を為さず、之を攻めれば必ず敗れ、札は敗れて則ち隗は自ら走らん矣。」

敦は之に従い、弘を以て前鋒と為し、石頭を攻め、札は果たして開門して弘を納れる。敦は石頭に據る。嘆じて曰く、

「吾は復た盛徳の事を為すを得ず矣！」（帝を輕視する言）

謝鯤は曰く、

「何爲れぞ其の然る也！但だ今より已往（以前）、日に忘れ日に去らしめん耳。」（6-019p）

■ 【朝廷側敗北、帝は王敦に使者】 帝は刁協、劉隗、戴淵に命じて衆を帥いて石頭を攻めしめ、王導、周顗、郭逸、虞潭等をして三道より出でて戦わしめ、協等の兵は皆な大敗す。太子の紹は之を聞き、自ら將士を帥いて決戦せんと欲す。車に升りて將に出でんとし、中庶子の溫嶠おもがは韃が（衛、くつわ）を執りて諫めて曰く、

「殿下は國之儲副なり、奈何して身を以て天下を輕んじるや！」

劍を抽きて韃むながを斬り、乃ち止む。敦は兵を擁して朝せず、士卒を放ちて劫掠し、宮省は奔散し、惟だ安東將軍の劉超は兵を按じて直衛し、及び侍中の二人は帝側に侍す。帝は戎衣を脱ぎ、朝服を著け、顧みて而して言つて曰く、

「我が處を得んと欲すれば、當に早く言わん！何ぞ民を害して此くの如く至るや！」

又た遣使して敦に謂つて曰く、

「公は若し本朝を忘れざれば、此に於いて兵を息めれば、則ち天下は尚ほ共に安んじる可し。如し其の然らざれば、朕は當に琅邪に歸りて以て賢路を避けん。」

■ 【刁協は殺され、劉隗は後趙に奔る】 刁協、劉隗は既に敗れ、俱に宮に入り、帝に太極の東除（殿の階）に於いて見る。帝は協、隗の手を執り、流涕嗚咽し、勸めて禍いを避けしむ。協は曰く、

「臣は當に死を守るべし、敢えて貳（二つ心）有らず。」

帝は曰く、

「今事は逼れり矣、安んぞ行かざる可けんや！」

乃ち協、隗に人馬を給せ令め、自ら計を為さ使む。協は老いて、騎乘に堪えず、素より恩紀無し、募りて従う者は、皆な之を委て、行きて江乘（県、江蘇省金陵道句容県の北、現・鎮江市句容市）に至り、人の殺す所と為り、首を敦に送る。隗は後趙に奔り、官は太子の太傅に至り而して卒す。

■【王敦を訪問した周顒の名台詞】帝は公卿百官をして石頭に詣り敦に見令め、敦は戴淵に謂って曰く、「前日之戦いは、餘力は有り乎？」

淵は曰く、「豈に敢えて餘有らんや、但だ力不足なる耳！」

敦は曰く、「吾が今の此の舉は、天下は以て何如と為すや？」

淵は曰く、「形を見る者は之を逆と謂い、誠を體する者は之を忠と謂う。」

敦は笑いて曰く、「卿は能く言うと言ふ可し。」

又た周顒に謂って曰く、

「伯仁、卿は我に負く！」（愍帝建興元年に周顒は杜弢の困しむる所となり、王敦に豫章に投ず、故に王敦は徳と為す）

顒は曰く、

「公の戎車は順を犯す、下官は親ら六軍を帥いて、其の事を能くせず、王旅（王帥）をして奔り敗ら使む、此くを以て公に負くなり。」

■辛未（18日）、大赦す。敦を以て丞相、都督中外諸軍、録尚書事、江州牧と為し、武昌郡公に封ず；并びに讓りて受けず。

【王敦は国政を専らにする】

■【王敦は王導を脅す】初め、西都が覆没するや、四方は皆な帝に進むを勧める（90 卷建武元年に見える）。敦は國政を専らにせんと欲し、帝の年長にて制し難きを忌み、更に立つる所を議さんと欲するも、王導は従わず。敦の建康に克つに及び、導に謂って曰く、

「吾の言を用いず、幾んど族を覆すに至らんとす。」

■【王敦の太子廢嫡は溫嶠の一言で失敗】敦は太子の勇略有るを以て、朝野の向かう所と為り、誣いて不孝を以て而して之を廢さんと欲す。大いに百官を會し、溫嶠に問いて曰く、

「皇太子は何の徳を以て稱せらるるか？」

聲色は俱に厲し。嶠は曰く、

「深きを釣り遠きを致し、蓋し淺局の量る所に非らず。禮を以て之を觀るに、孝と謂う可し矣。」

衆は皆な以て信に然りと為す、敦の謀は遂に沮む。

■【王敦はついに周顒・戴淵を捕える】帝は周顒を廣室（殿）に召し、之に謂って曰く、

「近日の大事は、（6-020p）二宮は恙無く、諸人は平安なり、大將軍は固に望む所に副う邪？」

顒は曰く、

「二宮は自ら明詔の如し、臣等は尚ほ未だ知る可からず。」

護軍長史（周顒は戴淵に代わりて護軍將軍となり、郝嘏を長史とす）の郝嘏等は顒に敦を避けるを勧め、顒は曰く、

「吾は位に大臣に備わり、朝廷は喪敗す、寧んぞ復た草間に活を求め、外に胡、越に投じる可けん邪！」

敦の參軍の呂猗は、嘗て台郎（尚書郎）と為り、性は奸諂にして、戴淵は尚書と為り、之を惡む。猗は敦を説いて曰く、

「周顒（汝南出身）、戴淵（廣陵の人）は、皆な高名有り、以て衆を惑わすに足る、近者之言（二人が王敦に答える言）は、曾て作じる色無し、公は之を除かざれば、恐らくは必ず再舉之憂有らん。」

敦は素より二人之才を忌み、心に頗る之を然りとし、従容として王導に問いて曰く、

「周、戴は南北之望にして、當に三司（大尉・司徒・司空）に登るは疑い無き也。」

導は答えず。又た曰く、

「若し三司にならざれば、止だ應に令僕（尚書令左右僕射）なる邪？」

又た答えず。敦は曰く、

「若し爾らざれば、正に當に誅すべし爾！」

又た答えず。丙子（23日）、敦は部將の陳郡の鄧岳を遣わして顗及び淵を収める。是より先、敦は謝鯤に謂って曰く、

「吾は當に周伯仁を以て尚書令と為し、戴若思（戴淵の字）を僕射と為さん。」

是の日、又た鯤に問う、

「近來人情は何如や？」

鯤は曰く、

「明公之舉は、大きく社稷を存せんと欲すると雖も、然るに悠悠之言（衆人は王敦の挙兵を義挙とは見ていない事）、實に未だ高義に達せず。若し果たして能く周、戴を舉用すれば、則ち群情は貼然（安心）ならん矣！」

敦は怒りて曰く、

「君は粗疏なる邪！二子は相い當たらず、吾は已に之を収めたり矣！」

鯤は愕然として自失す。參軍の王嶠は曰く、

「濟濟たる多士、文王は以て寧しと。奈何ぞ諸名士を戮せん！」

敦は大いに怒り、嶠を斬らんと欲す、衆は敢えて言う莫し。鯤は曰く、

「明公は大事を舉げ、一人を戮せず。嶠は獻替し旨に忤うを以て、便ち以て鼓に髹らば（人を殺して血を鼓に塗る）、亦た過まらず乎！」

敦は乃ち之を釋し、黜けて領軍長史と為す。嶠は、渾之族孫也。

■〔周顗・戴淵の誅殺〕顗は收め被れ、路は太廟を経て、大言して曰く、

「賊臣王敦は、社稷を傾覆し、忠臣を枉殺す。神祇に靈有れば、當に速かに之を殺すべし！」

收人は戟を以て其の口を傷つけ、血は流れて踵に至り、容止は自若たり、觀る者は皆な爲に流涕す。戴淵を并せて之を石頭の南門之外に殺す。

■〔王彬の氣骨〕帝は侍中の王彬（278-336、本貫は琅邪郡臨沂県。王羲之の叔父、王敦の従弟）をして敦を勞ら使む。

彬は素より顗と善し、先ず往きて顗を哭し、然る後に敦に見ゆ。敦は其の容の慘たるを怪しみて、之に問う。彬は曰く、

「向に伯仁（周顗）を哭し、情は已む能わず。」

敦は怒りて曰く、

「伯仁は自ら刑戮を致す。且つ凡人として汝を遇す、汝は何ぞ哀しみ而して之を哭するや？」

彬は曰く、

「伯仁は長者なり、兄之親友なり。朝に在りて讇愕（けんがく（喧々諤々、自由に議論するさま）無しと雖も、亦た阿黨するに非ず、赦の後に之に極刑を加える、傷惋（痛み悲しむ）する所以也。」

因りて勃然として敦を數めて曰く、

「兄は旌を抗げ順を犯し、忠良を殺戮し、不軌を為すを圖り、（6-021p）禍いは門戸に及ぶ矣！」

辭氣慷慨して、聲泪は俱に下る。敦は大いに怒り、聲を厲まして曰く、

「爾の狂悖なるは乃ち此に至る、吾を以て汝を殺す能わずと為す邪！」

時に王導は坐に在り、之が為に懼れ、彬に勧めて

「起って謝まれ。」

彬は曰く、

「脚が痛く拜する能わず！且つ此れ復た何を謝まるや！」

敦は曰く、

「脚痛むか頸痛むか孰^{いずれ}ぞや！」

彬は殊に懼れる容無く、竟に肯えて拜せず。

■ 〔王導は周顒が自分を弁護したのを知り悔やむ〕 王導は後に中書の記事を料檢（調査）し、乃ち顒が己を救う之表を見て、之を執りて流涕して曰く、

「吾は伯仁を殺さずと雖も、伯仁は我に由り而して死す、幽冥之中、此の良友に負^{そむ}けり！」

■ 沈充は吳國を抜き、内史の張茂を殺す。

■ 〔甘卓は旋軍して襄陽に帰る〕 初め、王敦は甘卓の兵を起こすを聞き、大いに懼れる。卓の兄の子の^{こう}印は敦の參軍^{さんぐん}為り、敦は印をして歸りて卓に曰わ使む、

「君は此れ自らは是れ臣の節なり、相い責めざる也。吾が家計は急にして、爾せざるを得ず。想うに便ち軍を襄陽^{かえ}に旋せば、當に更に好みを結ぶべし。」

卓は忠義を慕うと雖も、性は多く疑い少なく決す、猪口（夏水が河水に入る所、湖北省荊南道江陵県、現・荊州市江陵県）に軍し、諸方を待ちて同じく軍を出すを欲し、稽留すること累旬にして前まず。敦は既に建康を得る。乃ち台使を遣わして騶虞幡（軍を駐める旗）を以て卓の軍を駐^{とど}めしむ。卓は周顒、戴淵の死せるを聞き、流涕して印に謂って曰く、

「吾之憂うる所、正に今日の為なり。且つ聖上をして元吉に、太子をして恙無さ使めれば、吾は敦の上流に臨めども、亦た未だ敢えて遽^{にわか}に社稷を危うしとせず。適に吾は徑^{ただ}ちに武昌に據れば、敦の勢いは逼り、必ず天子を劫かし以て四海之望みを絶たん、襄陽に還り、更に後圖を思わんには如かず。」

即ち旋軍を命じる。都尉の秦康と樂道融は卓を説いて曰く、

「今兵を分けて彭澤（豫章郡の県、江西省潯陽道湖口県の東三十里、彭蠡湖が長江に入る口で、王敦軍を分斷可能、現・九江市湖口県彭澤県）を斷ち、敦をして上下相い赴くを得ざら使めば、其の衆は自然に離散し、一戦にして擒となす可き也。將軍は義兵を起こし而るに中止するは、竊^{ひそか}に將軍の為に取らず。且つ、士卒は各々其の利を求め、西に還るを求めんと欲するも、亦た恐らくは得可からざる也。」

卓は従わず。道融は晝夜泣いて諫め、卓は聽かず。道融は憂憤し而して卒す。卓の性は本より寛和にして、忽^{たちま}ち更に強塞（強暴窒塞）す、徑ちに襄陽に還り、意氣は騷擾し、舉動は常を失い、識者は其の將に死せんとするを知る矣。

■ 〔王敦は朝せずして武昌に還る〕 王敦は西陽王の^{こう}業を以て太宰と為し、王導に尚書令を加え、王廙を荊州刺史と為す。百官及び諸軍鎮を改易し、轉じ徙し黜け免ぜられる者は百を以て數える。或は朝行きて暮には改まり、惟だ意の欲する所なり。敦は將に武昌に還らんとし、謝鯤は敦に言つて曰く、

「公は都に至りて以來、疾を稱して朝せず、是れ助（勲）を立てると雖も而して人心は實に未だ達せざる有り。今若し天子に朝し、君臣をして釋然とせ使めれば、則ち物情は皆な悦びて服さん矣。」

敦は曰く：

「君は能く變無きを保つ乎？」

對えて曰く、

「鯢は近日入りて覲^{まみ}えしが、主上は席を側だて、公を見るを得るを遅し(待つ)とし、宮省は穆然(沈黙深思)として、必ず虞り無き也。公が若し入朝すれば、鯢は侍從するを請う。」(6-022p)

敦は勃然として曰く、

「正に復た君等數百人を殺すも、亦た復た何ぞ時に損せんや！」

竟に朝せず而して去る。夏，四月，敦は武昌に還る。

【長沙の譙王承の陥落】

■ 【周綬は城中に叫ぶ】 初め、宜都の内史の天門(吳の孫皓は永安六年に武陵郡を分けて置く郡)の周綬は譙王の承が兵を起こすを聞き、其の兄の子の該をして潜かに長沙に詣ら使め、款(誠)を承に申(申明)せしむ。魏乂等は湘州を攻めること急にして、承は該及び從事の邵陵(吳の孫皓は實鼎元年に零陵北部都尉を分けて邵陵郡を立つ)の周崎を遣わして間出して救いを求めしめ、皆な邏者の得る所と為る。又た崎をして城中に語ら使め、「大將軍は已に建康に克ち、甘卓は襄陽に還り、外援は理(資治通鑑紀事本末には外援阻絶)として絶えたり」と稱す。崎は偽りて之を許し、既に城下に至り、大呼して曰く、「援兵は尋いで至らん、努力して堅守せよ！」

乂は之を殺す。乂は該を考す。死に至るまで、竟に其の故を言わず、周綬は是に由りて免かるるを獲る。乂等は攻め戦いて日々逼り、敦は又た得る所の台中の人に書疏を送り、乂をして射て以て承に示さ令む。城中は朝廷の守られざるを知り、悵惋(嘆き恨む)せざるは莫し。相い持ちて且に百日ならんとし、劉翼は戦死し、士卒は死傷して相い枕す。癸巳(10日)、乂は長沙を抜き、承等は皆な執え被れる。乂は將に虞慄を殺さんとし、子弟は之に對して號泣す。慄は曰く、

「人生は當に死有るに會す、今闔門(一門全部)は忠義之鬼と為る、亦た復た何を恨むや！」

■ 【王敦は結局密かに易雄を殺す】 乂は檻車を以て承及び易雄を載せて武昌に送り、佐吏は皆な奔散し、惟だ主簿の桓雄、西曹書佐(府の諸曹には書記の補佐あり)の韓階、從事の武延は、服を毀ちて僮と為り(常服を毀して童奴の服を着る)、承に従い、左右を離れず。乂は桓雄の姿貌と舉止は凡人に非ずを見て、憚り而して之を殺す。韓階、武延は志を執ること愈々固し。荊州刺史の王廙は敦の旨を承け、承を道中に殺し、階、延は承の喪を送りて都に至り、之を葬り而して去る。易雄は武昌に至り、意氣忼慨し、曾て懼るるの容無し。敦は人を遣わして檄を以て雄に示し而して之を數め、雄は曰く、

「此れ實に之れ有り、雄の位は微力にして弱く、國難を救う能わざるを惜しむ耳。今日之死は、固より願う所也！」

敦は其の辭の正しきを憚り、之を釋し、遣りて舍に就かしむ。衆人は皆な之を賀し、雄は笑いて曰く、

「吾は安んぞ生を得ん！」

既に而して敦は人を遣わして潜かに之を殺す。

■ 魏乂は鄧騫を求めること甚だ急なり、郷人は皆な之が為に懼れ、騫は笑いて曰く、

「此れ我を用いんと欲する耳、彼は新たに州を得、多く忠良を殺し、故に我を求めて以て人望を厭^あかす也。」

乃ち往きて乂に詣る。乂は喜んで曰く、

「君は、古之**解揚**也。」（左傳に楚子は宋を囲む。晉は解揚を宋に往かしめ、宋が楚に降らないようにした。鄭人が捕えて楚に献じる。楚子は厚く之に賄してその言を変えようとしたが許さず。迫る三度、許す。楚は檻車に登らせ、宋人を呼びてこれに告げしむ。解揚は遂にその君命を致す。楚子は將にこれを殺さんとし、人として之と言わしめ、爾は既に不穀に許し、而してこれに反するは何が結えぞと。解揚は對えて曰く、「命を受けて出ずれば、死する有るも墮ろす無し。又賂う可けんや。臣が君に許せるは、以て命を成さんとなり。死して命を成すは臣の祿なり」と。楚子これを許して以て帰せり）

以て別駕と為す。（6-023p）

■詔して**陶侃**を以て湘州刺史を領せしむ。**王敦**は侃^{まお}を上して復た廣州に還し、散騎常侍を加える。

前趙甲午（11日）、前趙の**羊后**は卒す、諡して**獻文**と曰う。

■**〔王敦は甘卓を暗殺〕**甘卓の家人は皆な卓に**王敦**に備えるを勧め、卓は従わず、悉く兵を散じて佃作せしめ、諫を聞いて、輒ち怒る。襄陽太守の**周慮**は密かに**敦**の意を承け、詐りて言う、「湖中に魚多し」

と言い、卓に勧めて左右を遣わして悉く出でて魚を捕らしむ。**五月**、乙亥（23日）、**慮**は兵を引きて卓を寢室に襲い、之を殺し、首を**敦**に傳え、并せて其の諸子を殺す。**敦**は從事中郎の**周撫**を以て沔北諸軍の事を督さしめ、卓に代わりて沔中（南郷から襄陽に至る沔水沿い）に鎮ぜしむ。**撫**は、訪之子也。

■**〔王敦と側近の暴慢凶險驕恣〕****敦**は既に志を得、暴慢は滋々甚しく、四方の貢獻は多く其の府に入り、將相岳牧（舜の時に四岳十二牧有り、故に方面に居る者を岳牧という）皆な其の門に出ず。**沈充**、**錢鳳**を以て謀主と為し、唯だ二人之言に是れ従い、譖する所は死せざる者無し。**諸葛瑤**、**鄧岳**、**周撫**、**李恒**、**謝雍**を以て爪牙と為す。**充**等は并びて凶險驕恣にして、大いに營府を起こし、人の田宅を侵し、市道を剽掠し、識者は鹹な其の將に敗れるを知る焉。

後趙■**〔石虎は泰山を抜く〕****秋**、**七月**、後趙の中山公の**虎**は泰山を抜き、**徐龕**を執りて襄國に送る。後趙王の**勒**は之を盛るに囊を以てし、百尺の樓上に於いて之を撲殺し、**王伏都**（徐龕が王伏都を殺すは前卷大興二年にあり）等の妻子に命じて剝^{むぐ}りて而して之を食わしめ、其の降卒三千人を坑す。

■**〔郝鑒は後趙に追われ合肥に退く〕**兗州刺史の**郝鑒**（愍帝建興元年に鎮ぜしむ）は鄒山に在ること三年、衆數萬有り。戰爭して息まず、百姓は饑饉し、野鼠、蟄燕（燕は秋を経て蟄す）を掘り而して之を食ひ、後趙の逼る所と為り、退きて合肥に屯す。尚書右僕の**射紀瞻**は、以えらく**鑒**の雅望は清徳にして、宜しく台閣に從容として、上疏して之を征せんと請う。乃ち征して尚書を拜す。徐、兗の間の諸々の塢は多く後趙に降り、後趙は守宰を置いて以て之を撫す。

■**王敦**は自ら（君命でないという意味）寧、益二州都督を領す。

■**〔王敦の支配体制〕****冬**、**十月**、己丑（9日）、荊州刺史の武陵康侯の**王廙**は卒す。**王敦**は下邳内史の**王邃**を以て都督青、徐、幽、平四州諸軍事とし、淮陰に鎮せしむ。衛將軍の**王含**を都督沔南諸軍事とし、荊州刺史を領せしむ。武昌太守の丹楊の**王諒**を交州刺史と為す。**諒**をして交州刺史の**修湛**、新昌（孫皓建衡三年交趾を分けて新興郡を立て、武帝太康三年に改めて新昌郡とす）太守の**梁碩**を收め之を殺さ使めんとす。**諒**は**湛**を誘いて之を斬る。**碩**は兵を舉げて**諒**を龍編（交趾郡の県、安南）に圍む。

■**後趙****〔後趙は陳留を取る〕****祖逖**は既に卒し、後趙は屢々河南を寇し、襄城、城父（県、河南省河洛道宝豊県、現・平頂山市宝豊県）を抜き、譙を圍む。豫州刺史の**祖約**は禦ぐ能わず、退きて壽春に屯す。後趙は遂に陳留を取り、梁、鄭之間は復た騒然とす矣。

■**十一月**，臨穎元公の**荀組**を以て太尉と為す。辛酉（12日），薨ず。

■司徒を罷め，丞相府に并す。**(6-024p)** 王敦は司徒の官屬を以て留府と為す。（王敦は武昌にありて建康を制す）

■**〔帝は憂憤して崩ず〕** 帝は憂憤して疾いと成り，**閏月**（元嘉曆十二月），己丑（10日），崩ず（年47）。司空の**王導**は遣詔を受けて輔政す。帝は恭儉餘り有り而して明斷は不足し，故に大業は未だ復せず而して禍亂は内に興る。庚寅（11日），太子は皇帝に即位し，大赦し，生む所の母の**荀氏**を尊びて**建安君**と為す。

前趙 **〔劉曜の父母の墓の造営に民苦しむ〕** **十二月**（元嘉曆一月），趙主の**曜**は其の父母を栗邑そくゆうに葬し，大赦す。陵の下周は二里（続、裏×），上高は百尺，計は六萬夫を用いて，之を作るに百日にして乃ち成る。役者は夜作り，繼ぐに脂燭を以てし，民は甚だ之を苦しむ。**游子遠**は諫めるも，聽かず。

後趙 後趙の濮陽景侯の**張寶**は卒す，後趙王の**勒**は之を哭して慟し，曰く、

「天は吾が事を成すを欲せず邪？何ぞ吾が右侯を奪う之早き也！」

程遐は代わりて右長史と為る。**遐**は，世子**弘**之舅也，**勒**は毎に**遐**と議し，合わざる所有り，輒ち嘆じて曰く、

「右侯は我を捨てて去り，乃ち我をして此の輩と事を共にせ令む，豈に酷に非ず乎！」

因りて流涕すること日を彌わたる。

前涼 **張茂**は將軍の**韓璞**をして衆を帥いて隴西、南安之地を取ら使め，秦州を置く。

▲**〔慕容皝は段氏を襲う〕** **慕容廆**は其の世子の**皝**を遣わして**段末杯**を襲わしめ，令支（直隸省津海道遷安県、現・唐山市遷安市）に入り，其の居民千餘家を掠めて而して還る。

中宗元皇帝下太寧元年、肅宗明皇帝上（癸未，323年）

大成 ■**春，正月**（元嘉曆二月），成の**李驤**、**任回**は台登（越嶲郡に属す県、四川省建昌道冕寧県の東、現・涼山イ族自治州冕寧県）を寇し，將軍の**司馬玖**は戦死し，越嶲太守の**李釗**、漢嘉太守の**王載**は皆な郡を以て成に降る。

■**二月**（元嘉曆三月），庚戌（13日），**元帝**を建平陵に葬す。（明帝の字は道叢、元帝の長子）

■**三月**（元嘉曆四月），戊寅（1日）朔，改元す。

■**饒安**（直隸省津海道鹽山県西南、現・滄州市鹽山県）、**東光**（津海道東光県、現・滄州市東光県）、**安陵**（津海道吳橋県、現・滄州市吳橋県）の三縣（皆渤海郡）は災（災）ありて，七千餘家を焼き，死者は萬五千人なり。

後趙 後趙は彭城、下邳を寇し，徐州刺史の**卞敦**は征北將軍の**王邃**と與に退きて盱眙を保つ。**敦**は，**壺**之從父兄也。

【王敦篡奪の試み】

■**〔王敦に黃鉞班劍〕** **王敦**は位を篡わんと謀り，朝廷に諷して己に征せしむ。**帝**は手ずから詔して之を征す。**夏，四月**（元嘉曆四月閏月），**敦**に黃鉞、班劍（勇士を行列して劍を捧げて儀仗す）を加え，事を奏するに名せず，入朝して趨せず，劍履して殿に上がらしむ。**敦**は移りて姑孰に鎮し，于湖（安徽省蕪湖道當塗県の南、現・馬鞍山市当塗県）に屯し，司空の**導**を以て司徒と為し，**敦**は自ら揚州牧を領す。**敦**は逆を為さんと欲し，**王彬**は之を諫めて甚だ苦ねんごろなり。**敦**は色を變え，左右に目くばせし，將に之を收めんとし。**(6-025p)** **彬**は色を正して曰く、

「君は昔歳兄を殺し，今又た弟を殺す邪！」（王澄を殺すは80 卷懷帝永嘉六年）

敦は乃ち止み，**彬**を以て豫章太守と為す。

後趙 **〔後趙は慕容廆との修好に失敗〕** 後趙王の**勒**は遣使して**慕容廆**と好みを結ばんとし、**廆**は執りて建康に送る。

■ **大成** **〔成の侵攻を寧州は撃退〕** 成の**李驤**等は進みて寧州を攻め、刺史の褒中の壯公の**王遜**は將軍の**姚岳**等をして之を拒ま^{とうろう}せめ、**蟪蛄**（犍為郡の県、四川省永寧道宜賓県、現・宜賓市叙州区）に於いて戦い、成兵は大いに敗る。**岳**は追いて瀘水に至り、成兵は争^{むな}いて濟り、溺死する者は千餘人。**岳**は道の遠きを以て、敢えて濟らず而して還る。**遜**は**岳**の窮追せざるを以て、大いに怒り、之を鞭ち、怒りは甚しく、冠は裂け而して卒す。**遜**は州に在ること十四年（懷帝永嘉四年より）、威は殊俗に行われ、州人は其の子の**堅**を立てて州の府事（寧州の南夷校尉府）を行わしむ。詔して**堅**を寧州刺史に除す。

■ **〔交州刺史の王諒は節を与えず〕** 廣州刺史の**陶侃**は兵を遣わして交州を救わんとす。未だ至らず、**梁碩**は龍編を抜き、刺史の**王諒**の節を奪わんとし、**諒**は與えず、**碩**は其の右臂を斷つ。**諒**は曰く、「死すら且つ避けず、臂を斷つとも何と爲さん！」

旬を逾え而して卒す。

■ **六月**，壬子（6日），妃の**庾氏**を立てて皇后と為す。後の兄の中領軍の**亮**を以て中書監と為す。

■ **〔交州の梁碩を殺し、次いで高寶・阮放も死す〕** **梁碩**は交州に據り、凶暴にして衆心を失う。**陶侃**は參軍の**高寶**を遣わして**碩**を攻め、之を斬る。詔して**侃**を以て交州刺史を領せしめ、進めて征南大將軍、開府儀同三司を號せしむ。未だ幾もなくして、吏部郎の**阮放**は交州刺史と為るを求め、之を許す。**放**は行きて寧浦（広西省南寧道舊南寧府内、現・南寧市邕寧区）に至り、**高寶**に遇い、**寶**の為に饌を設け、兵を伏して之を殺す。**寶**の兵は**放**を撃ち、**放**は走り、免かるを得、州に至る。少時にして、病いに卒す。**放**は、**鹹**之族子也。

【**陳安は滅亡し、姚弋仲出る**】

前趙 **〔陳安は前趙を攻め、劉曜は遂に滅ぼす、姚弋仲登場〕** **陳安**は趙の征西將軍の**劉貢**を南安に圍み、休屠王の**石武**は桑城より兵を引いて上邽に趣き以て之を救わんとし、**貢**と**安**を合撃し、大いに之を破る。**安**は餘騎八千を收め、走りて隴城を保つ。**秋，七月**，趙主の**曜**は自ら將いて隴城を圍み、別に兵を遣わして上邽を圍む。**安**は頻りに出でて戦い、輒ち敗る。右軍將軍の**劉幹**は平襄（略陽郡の県、甘肅省渭川道通渭県の西南、現・定西市通渭県）を攻め、之に克ち、隴上の諸縣は悉く降る。**安**は其の將の**楊伯支**、**姜冲兒**を留めて隴城を守らしめ、自ら精騎を帥いて圍み突きを、出でて陝中（隴城の南、甘肅省渭川道舊秦州内、現・天水市秦州区）に奔る。**曜**は將軍の**平先**等を遣わして之を追う。**安**は左に七尺の大刀を揮い、右に丈八の蛇矛^{めぐら}を運し、近きは則ち刀矛俱に發し、輒ち五六人を殪^{たお}し、遠きは則ち左右馳せて射て而して走る。先に亦た勇捷なるは飛ぶが如く、**安**と搏戦すること、三交（三回戦う）し、遂に其の蛇矛を奪う。會々日暮れ雨甚だしく、**安**は馬を弃て左右と山中に匿れる。趙兵は之を（搜）索し、在る所を知らず。明くる日、**安**は其の將の**石容**を遣わして趙兵を覘^すわしめ、趙の輔威將軍の**呼延青人**は之を獲り、**安**の在る所を拷問し、**容**は卒に肯て言わず、**青人**は之を殺す。（6-026p）雨霽^はれ、**青人**は其の迹を尋ね、**安**を澗曲に獲り、之を斬る。**安**は善く將士を撫し、與に甘苦を同じくし、死に及びて、隴上の人^{ため}は之を思い、爲に《壯士之歌》を作る。**楊伯支**は**姜冲兒**を斬り、隴城を以て降る。別將の**宋亭**は**趙募**を斬り、上邽を以て降る。**曜**は秦州の大姓の**楊**、**姜**の諸族二千餘戸を長安に徙す。氐、羌は皆な任（人質）を送り降らんと請う。赤亭羌の酋の**姚弋仲**を以て平西將軍と為し、平襄公に封じる。

■ **〔郗鑒を巡る帝と王敦の対立〕** 帝は**王敦**之逼るを畏れ、**郗鑒**を以て外援と為さんと欲し、**鑒**を拜して亮

州刺史，都督揚州江西諸軍事と為し，合肥に鎮ぜしむ。**王敦**は之を忌み，**鑒**を表して尚書令と為す。**八月**，詔して**鑒**を征して還らしめ，道は姑孰を経て，**敦**は之と與に西朝（江東・洛都の晉朝）の人士を論じて，曰く、「**樂彥輔**（樂廣の字）は，短才耳。其の實を考えるに，豈に**滿武秋**（滿奮の字）に勝らん邪！」

鑒は曰く、

「**彥輔**は道韵平淡にして，**愍**（帝）**懷**（帝）之廢せられるや，柔に而して能く正す。**武秋**は節を失う之士（83卷惠帝元年）なり，安んぞ之に擬するを得んや！」

敦は曰く、

「是の時に当たり，危機は交々急なり。」

鑒は曰く、

「丈夫は當に死生之を以てすべし。」

敦は其の言を惡み，復た相い見ず，久しく留めて遣らず。**敦**の黨は皆な**敦**に之を殺すを勧め，**敦**は従わず。

鑒は台に還り，遂に帝と**敦**を討たんと謀る。

【石虎は山東の曹嶷を滅ぼす】

後趙 **後趙石虎は廣固を落とす** 後趙の中山公の**虎**は歩騎四萬を帥いて安東將軍の**曹嶷**を撃ち，青州の郡縣は多く之に降り，遂に廣固（山東省膠東道益都県の西南、現・濰坊市青州市）を圍む。**嶷**は出で降り，襄國に送りて之を殺し，其の衆三萬を坑す。**虎**は盡く**嶷**の衆を殺さんと欲し，青州刺史の**劉征**は曰く、

「今征を留めるは，民を牧せ使む也，民無くして焉んぞ牧せん！征（続は徵）は將に歸らんとする耳！」

虎は乃ち男女七百口を留めて征に配し，廣固に鎮ぜ使む。

【劉曜は前涼を攻撃】

前趙 **前涼** **劉曜は前涼を撃ちて相持ち、結局前涼は称藩** 趙主の**曜**は隴上より西に涼州を撃ち，其の將の**劉威**を遣わして**韓璞**を冀城に攻める，**呼延晏**は寧羌護軍の**陰鑒**を桑壁に攻め，**曜**は自ら戎卒二十八萬を將して河上に軍し，列營は百餘裏（里），金鼓之聲は地を動かし，河水は爲に沸き，**張茂**の河に臨む諸戎は，皆な風を望みて奔潰す。**曜**は聲を揚げて、

「百道俱に濟り，直ちに姑臧に抵らんと欲す」

と，涼州は大いに震う。參軍の**馬岌**は**茂**に親ら出でて拒み戦うを勧め，長史の**汜禕**は怒り，之を斬らんと請う。**岌**は曰く、

「**汜公**は糟粕（酒粕、殘骸）の書生なり，刺舉（刺は直に譏る、舉は人の過失を挙げる）の小才にして，家國の大計を思わず。明公の父子は朝廷の為に**劉曜**を誅せんと欲すること年有り矣，今**曜**は自ら至り，遠近之情は，共に明公の此の舉を觀る，當に信勇之驗を立て以て秦、隴之望に副うべし。力は敵わずと雖も，（6-027p）勢いは以て出でざる可からず。」

茂は曰く、

「善し！」

乃ち出でて石頭（姑藏城の東、甘肅省甘涼道武威県の東、現・武威市）に屯す。**茂**は參軍の**陳珍**に謂って曰く、

「**劉曜**は三秦之衆を擧げて，勝ちに乗りて席捲し而して來たる，將に之を若何せん？」

珍は曰く、

「**曜**の兵は多しと雖も，精卒は至って少なし，大抵は皆な氐、羌の烏合之衆なり，恩信は未だ洽かず，且つ山東之虞（石勒と相闘るをいう）有り，安んぞ能く其の腹心之疾いを捨て，曠日持久して，我と河西之地

を争わん邪！若し二旬にして退かざれば、**珍**は請う弊卒數千を得て、明公の為に之を擒にせん。」

茂は喜び、**珍**をして兵を將いて**韓璞**を救わ使む。趙の諸將は争いて河を濟らんと欲し、趙主の**曜**は曰く、「吾が軍勢は盛んなりと雖も、然も威を畏れ而して來たる者は三分の二有り、中軍は疲れ困じ、其の實は用い難し。今は但だ甲を按じて動く勿かれ、吾が威聲を以て之を震わし、若し中旬を出でて**張茂**之表の至らざる者ならば、吾は卿に負くと為す矣。」

茂は尋いで遣使して稱籓し、馬、牛、羊、珍寶を獻じて勝げて紀す可からず。**曜**は**茂**を拜して侍中、都督涼、南北秦、梁、益、巴、漢、隴右、西域雜夷、匈奴諸軍事、太師、涼州牧とし、涼王に封じ、九錫を加える。

前趙 **〔楊難敵は陳安の死に動揺、大成と戦う〕** **楊難敵**は**陳安**の死するを聞き、大いに懼れ、弟の**堅頭**と南に漢中に奔り、趙の鎮西將軍の**劉厚**は追いて之を撃ち、大いに獲り而して還る。趙主の**曜**は大鴻臚の**田崧**を以て鎮南大將軍、益州刺史と為し、仇池に鎮ぜしむ。**難敵**は任を送り成に降を請い、成の安北將軍の**李稚**は**難敵**の賂を受け、**難敵**を成都に送らず。趙の兵は退き、即ち遣りて武都に歸らしめ、**難敵**は遂に險に據りて服さず。**稚**は自ら計を失うを悔い、亟かに之を討たんと請う。**雄**は**稚**の兄の侍中、中領軍の**玠**を遣わして**稚**と與に白水（甘肅省渭川道の舊岷州階州を流れる）に出で、征東將軍の**李壽**及び**玠**の弟の**珩**をして陰平（甘肅省渭川道文県、現・隴南市文県）に出で、以て**難敵**を撃たしむ。群臣は諫めるも、聽かず。**難敵**は兵を遣わして之を拒み、**壽**、**珩**は進むを得ず、而して**玠**、**稚**は長驅して下辨に至る。**難敵**は兵を遣わして其の歸路を斷ち、四面より之を攻める。**玠**、**稚**は深く入りて繼ぐ無く、皆な**難敵**の殺す所と為り、死者は數千人。**玠**は、**蕩**之長子なり、才望有り、**雄**は以て嗣と為さんと欲し、其の死を聞き、食わざる者數日なり。

前趙 **〔前趙の後継者選考〕** 初め、趙主の**曜**の長子の**儉**、次子の**胤**あり。**胤**の年は十歳、長は七尺五寸、漢主の**聰**は之を奇とし、**曜**に謂って曰く、

「此の兒の神氣は、**義真**（**劉儉**の字）之比に非らざる也、當に以て嗣と為すべし。」

曜は曰く、

「籓國之嗣は、能く祭祀を守れば足りん矣、敢えて長幼之序を亂さず。」

聰は曰く、

「卿之勛德は、當に世々專征之任（方伯となり征伐を専らにす）を受けるべし、他臣之比に非ざる也、吾は當に更に一國を以て**義真**に封じん。」

乃ち**儉**を封じて臨海王と為し、**胤**を立てて世子と為す。既に長じ、多力にして善く射、驍捷なるに風の如し。**斬准**之亂（90 卷大興元年）に、**黑匿郁鞠**（匈奴の一種、胤を掃すや、劉曜は左賢王と為す）の部に没す。**陳安**の既に敗れるや、**胤**は自ら**郁鞠**に言い、（6-028p）**郁鞠**は大いに驚き、禮し而して之を歸す。**曜**は悲喜し、君臣に謂って曰く、

「**義光**（太子熙の字）は已に太子に為ると雖も、然れども冲幼にして儒謹、恐らくは今之多難に堪えず。**義孫**（胤の字）、故に世子也、材器は人に過ぎ、且つ艱難を涉曆す。吾は周の**文王**、漢の**光武**に法り、以て社稷を固め而して**義光**を安ぜんと欲すが、何如や？」

太傅の**呼延晏**等は皆な曰く、

「陛下は國家の無窮之計を為せば、豈に惟だ臣等は之に頼るのみ、實に宗廟四海之慶なり。」

左光祿大夫の**卜泰**、太子の太保の**韓廣**は進みて曰く、

「陛下は廢立を以て是と為せば、應に更に群臣に問うべからず。若し以て疑いと為し、固に^{まこと}異(異)同之言を聞くを楽しむ。臣は竊かに以^{おも}爲うに太子を廢するは、非ざる也。昔文王は嗣を未だ立つ之前に定めるは、則ち可也。光武は母の恩を失うを以て而して其の子を廢すは、豈に聖朝之法と為すに足りるや！向に東海を以て嗣と為し、未だ必ずしも明帝の如くならざるあらざる也。胤の文武才略は、誠に高く世を絶す。然れども太子は孝友仁慈にして、亦た承平の賢主と為すに足る。況んや東宮者、民、神の系る所、豈に輕々しく動かす可けんや！陛下は誠に是くの如くせんと欲するならば、臣等は死し而して已む有り、敢えて詔を奉じず」

曜は默然とす。胤は進みて曰く、

「父之子に於けるは、當に之を愛すること一の如し、今熙を黜けて而して臣を立てれば、臣は何ぞ敢えて自ら安んじん！陛下は苟くも臣を以て頗る驅策するに堪えたりと為せば、豈に熙を輔けて以て聖業を承ける能わざる乎！必ず若し臣を以て熙に代えれば、臣は請う死を此に效さんと、敢えて命を聞かず。」

因って獻歔(噉り泣く)して流涕す。曜は亦た熙が羊後の生む所なるを以て、廢するに忍びざる也、乃ち前の妃の卜氏に追諡して元悼皇后と為す。泰は、即ち胤之舅也、曜は其の公忠を喜び、以て上光祿大夫、儀同三司と為し、太子の太傅を領せしむ。胤を封じて永安王と為し、侍中、衛大將軍、都督二宮(劉曜と太子)禁衛諸軍事、開府儀同三司、錄尚書事を拜し、熙に命じて胤に於いて家人之禮を盡くさしむ。

前涼 **〔姑臧の城の強化の論争〕** 張茂は大いに姑臧に城きづき、靈鈞台(元帝の大興四年に築く)を修む。別駕の吳紹は諫めて曰く、

「明公の城を修め台を築く所以の者は、蓋し既往之患い(劉曜の来寇)に懲りる耳。愚は以^{おも}爲うに苟しくも恩は未だ人心に^{あまな}洽かならざれば、層台に處ると雖も、亦た益する所無く、適に以て群下の忠信之志を疑い、士民の系托之望みを失い、怯弱之形を示し、鄰敵之謀を啓^{ひら}くに足らん、將に何を以て天子を佐け、諸侯に霸ならんとする乎！願はくは亟かに茲の役を罷め、以て勞費を息むべし。」

茂は曰く、

「亡兄が一旦身を物に失い、豈に忠臣義士の節を盡くさんと欲す者無からん哉！顧みるに禍いは不意に生じ、智勇有りと雖も、施す所無き耳。王公は險を設け、勇夫重ねて閉じるは、古之道也。(6-029p) 今國家は未だ靖からず、太平之理を以て人を屯遭(屯難にして進み難き、易の屯身に謂う、屯如たり遭如たり)之世に責める可からざる也。」

卒に之を爲す。

■ **〔王允之は王敦の反を密告〕** 王敦の從子の允之は、方に總角(小兒の鬢を左右に分けて結ぶ、幼少の意味)にして、敦は其の聰警(聰明で機知に富む)を愛し、常に以て自らに隨わしむ。敦は常に夜飲み、允之は酔うと辭して先に臥す。敦は錢鳳と逆を為さんと謀り、允之は悉く其の言を聞く。即ち臥處に於いて大いに吐きて、衣面は并びて汚す。鳳は出で、敦は果たして照らし視て、允之の吐中に臥するを見、復た之を疑わず。會々其の父の舒は廷尉に拜せられ、允之は歸りて父を省せんことを求め、悉く敦、鳳之謀を以て舒に白す。舒は王導と俱に帝に啓し、陰かに之が為に備える。敦は其の宗族を強くし、帝室を陵弱せんと欲し、冬、十一月、王含を徙して征東將軍、都督揚州江西諸軍事と為し、王舒を荊州刺史と為し、荊州沔南諸軍事を監ぜしめ、王彬を江州刺史と為す。

後趙 **〔樊坦の衣冠の弊壞〕** 後趙王の勒は參軍の樊坦を以て章武内史と為す、勒は其の衣冠の弊壞を見、

之に問う。坦は率然として對えて曰く、

「頃 ^{ちかごろ}羯賊の掠む所と為り、資財は蕩盡す。」

勅は笑いて曰く、

「羯賊は乃ち爾 ^{しか}く無道なる邪！今當に相い償うべし。」

坦は大いに懼れ、叩頭して泣いて謝る。勅は車馬、衣服、裝錢三百萬を賜わり而して之に遣る。

大成 是の歲、越嵩の斯叟は成將の任回を攻め、成主の雄は征南將軍の費黑を遣わして之を討つ。

■ **〔王敦は周札一門の排除を図る〕** 會稽内史の周札は、一門に五侯あり、宗族は強盛にして、吳士の與に比を為す莫し、王敦は之を忌む。敦は疾有り、錢鳳は敦に早く周氏を除くを勸め、敦は之を然りとす。周嵩は兄の顗之死（元帝永昌元年）を以て、心は常に憤憤たり。敦は子無く、王含之子の應を養いて嗣と為し、嵩は嘗て衆中に於いて、

「應は宜しく兵を統べるべからず」

と言ひ、敦は之を惡む。嵩は札の兄の子の廷と皆な敦の從事中郎と為る。會々道士の李脱は妖術を以て衆を惑わし、士民は頗る信じて之に事える。

令和 3 年 5 月 1 日 10212 文字

令和 3 年 5 月 10 日 21061 文字、現代地名・年表対応

令和 3 年 11 月 21 日 21473 文字